

嵯峨御製の法格と詩想

渡 辺 三 男

一 はじめに

二 嵯峨天皇の文業

三 嵯峨御製の法格と詩想

一 はじめに

先年、私が古稀の馬齢を迎えたとき、^(注1)私のために、同僚知友相図って、老骨を労わり励ますための盛宴を催していただき、席上、積年の畏友山田巖教授を長とする編集委員会のお骨折による『古稀祝賀記念・日中語文交渉史論叢』の献呈を受けて感激した。

ほんのこの間のことであったが、お骨折りいただいた山田先生はじめ、巻頭に題字をいただいた永平寺貫主秦慧玉禪師、同じく巻頭に祝詞をいただいた当時の駒沢大学総長岡本素光先生が、相次いで鬼籍に入られた上、盛宴の片隅で、喜びをわかった小妻も已に亡く、感慨一入であった。

右の記念論集に、私自身も、「嵯峨天皇の唐風謳歌」と題する拙稿を載せていただいた。以来私は、嵯峨天皇にご縁の論稿を書きつ

いでいる。

嵯峨天皇こそ、平安初頭に、わが国の文学史上、空前絶後ともいふべき、漢詩文全盛の時代を招来された、英明卓絶の指導者であられたと考えるからである。

相次いで撰進された勅撰三詩集のうち、『凌雲集』(一卷)は、嵯峨帝の勅を奉じた小野岑守が、菅原清公等と相議して撰集した集であり、次の『文華秀麗集』(三巻)は、嵯峨天皇の勅を奉じた藤原冬嗣が、仲雄王等に命じて撰集した集であり、『経国集』(二〇巻)は、淳和天皇が、皇兄嵯峨上皇の勸説を受けて、良岑安世に詔を下し、滋野貞主等に撰集せしめられた集である。

これらの三勅撰詩文集を一覧することによって、平安初頭が、いかに漢詩文全盛の画期的な一時期であったかを理解し、その風潮を推進された指導者が、嵯峨天皇であったことを知ることができ

る。
嵯峨帝は、その初政において、同母の皇兄平城上皇との間に、不幸な反目があったが、勝利のうちに、それを克服された後は、治政

ゆるぎなく、さらに異母同年の皇弟淳和帝に譲位、嵯峨の離宮（今の大覚寺）に退休後も、上皇として国政を指導し、天皇家の家父長として、皇親・臣僚の上に君臨して、上下の敬仰をお受けになった。

天皇は、天資英邁な好学好文の王者で、上下の皇親・臣僚に、学問を奨め、作詩作文を召されたが、天皇自らも率先して垂範された。

勅撰三集の撰進も、天皇の発議無しには、実現は有り得なかった。その上、三集全詩篇（一、一五五首）のうちで、天皇が、もっとも多作（大覚寺本九五首）であり、真に実力有る指導者であった。

嵯峨天皇のご遺文に就いては、

『続日本後紀』天皇の崩御を伝える承知九年七月丁未の条に、御大葬に就いて、御棺の事・上下喪服用の事・御葬列・御陵・御法会等、質素節約を主とすべき旨、予め誠めおかれた遺詔の全文（一三五字）が、「送終」と名づけて掲げられているのを見ることができ、東国の蝦夷征討に武功の有った坂上田村麻呂の伝記『田村麻呂伝記』や、鷹狩に使役する鷹の飼養法や放鷹すなわち鷹狩に関する諸心得を綴られた『鷹経』も、天皇の御製と伝える。ただし、いずれも掌篇である。

そのほか『北院御室拾葉集』に伝存を伝える『嵯峨天子御記』や、『真俗交談記』に遺存を伝える『嵯峨天皇御記』も、二、三十字の断簡に過ぎないから、天皇の散文表現の御造詣を、十二分にお察しすることは、残念ながら困難である。

和歌も、『類聚国史』卷卅一に、二首を伝えるのみである。

その一は、平城天皇の大同二年（八〇七）九月廿一日乙巳の条に、神泉苑に天皇行幸、琴歌間奏、四位已上、いずれも菊の花を冠にかざして寿いだ園遊の折から、時に皇太弟であった嵯峨帝が、頌歌を詠じて

宮人の その香に感づる 藤袴 君のおほ物 たをりたる今日

その二は、嵯峨天皇の弘仁四年（八一三）四月廿二日甲辰の条に、嵯峨帝が、皇太弟（後の淳和帝）の南池の苑に行幸、文人に命じて詩を賦せしめられた折、右大臣従二位藤原朝臣園人が歌を上つて、けふの日の 池のほとりに ほととぎす 平らは千代と 啼くは聞きつや

と詠じたのに和して、天皇が

ほととぎす 啼く声聞けば 歌主と ともに千代にと 我も聞きたり

と、お返しになった。原歌は、万葉仮名。右の二首以外には、嵯峨帝御製の和歌を見つけることができない。

御製十万首と伝えられる明治大帝をはじめ、歴代天皇の中には、歌人天皇と称えるにふさわしい天皇は少なくない。嵯峨帝は、平安初頭屈指の文人天皇であったから、右に見るごとく、和歌には和歌を以って、即刻に、唱和された。しかも、御製の和歌の伝存するものが、ただ二首だけというのは、どういふことであろうか。

和歌にも、一首の文芸作品として完成させるためには、凡百の修飾、鏤骨の彫琢を必要とするこはいうまでもない。しかし守るべき、韻文としてのいわゆる法格は、五・七・五・七・七のただ一つの音数律にしばられるのみである。

これに対して、漢詩は、日本人にとっては、異国語である漢語を用い、和歌よりもはるかに煩瑣な法格を守って制作する知的労作の文学形態である。このことは、前稿^(注2)において、嵯峨帝の七言律詩「江頭春曉」を挙げて、

七言律詩が、詩として成り立つためには、

(1) 七言八句で構成されなければならない(音数律)。

(2) 句末に、同韻の語が配置されていなくてはならない(脚韻法・音位律)。

(3) 各句の第二語と第四語は、ちがった平仄(二・四不同)、第二語と第六語は、同じ平仄(二・六対)でなくてはならない(音性律)。

(4) 律詩は、順次二句ずつ、意味の上で、一つのまとまりをもった聯を構成していなくてはならない。

など、漢詩に不可欠のさまざまな法格の有ることを紹介したが、あの煩瑣とも思えるばかりの数々の法格を克服して完成された作品には、あたかも、鋭利な旋盤にかけられて、切削研磨された鋼材のごとき、精緻で硬質の知巧美が感ぜられるのではないか。

われわれ日本人にとって、異国の言語である漢語を、異国の文字である漢字を用いて表現した異国の文学美に触れることは、新たな悦びであったが、その読解・賞美は、必ずしも容易ではなかったのではないか。しかし、なにごとにも、苦痛の克服、抵抗の排除は、悦びでもある。人々を奮起させ前進を促がす。

かくして、嵯峨帝をはじめとする平安初頭の知識人は、異国の文学漢詩文を享受し、進んで、伝来の和歌に代え得る文学美の表現手

段としたのではないか。

二 嵯峨天皇の文業

嵯峨御製の散文形態については、先に触れた。御製詩篇の総数については、諸書必ずしも一致しない。試みに二、三の例を挙げてみると、古くは、昌平蠻の元学員長で、富山藩学の教授二十余年に及んだ市河寛斎(文政三卒、七十二歳)の畢生の労作『日本詩紀』には、九七首を載せ、『聖徳餘光』^(注3)(紀元二千六百年奉祝会刊、辻善之助編)には、九五首(凌雲集二二首・文華秀麗集三三首・経国集四〇首)を載せ、後藤昭雄氏の『平安朝漢文学論考』(昭和五六刊)には、九三首とある。

明治四一、二年度の東京大学における講義を、逝去後、昭和三年上梓された芳賀賀矢一博士の『日本漢文学史』、近くは川口久雄氏の『平安朝漢文学史』(昭和六刊)、『小野機太郎氏』の『日本漢文学史』(岩波講座、昭和七刊)、いずれも、嵯峨帝を詩人天皇としてその業績を讀んで紙幅を献じているが、詩篇の数には触れていない。

架蔵の京都大覚寺編『嵯峨天皇紀』^(注4)には、九五首(凌雲集二二首・文華秀麗集三四首・経国集三九首)^(注5)が見える。私の依ったその本を、以下しばらく大覚寺本と呼んでおく。

嵯峨御製を、法格別、且つ詩数の多少の順に類別してみると、次のようになる。『凌』・『文』・『経』は、勅撰詩集のそれぞれの略。洋数字は詩数。()内は、その集の詩文の総数。

| | | |
|------|------------------------|------|
| 七言律詩 | 『凌』13・『文』9・『経』6 | 計28首 |
| 七言絶句 | 『凌』3・『文』3・『経』16 | 22首 |
| 五言律詩 | 『凌』2・『文』10・『経』5 | 17首 |
| 雜言 | 『凌』1・『文』2・『経』6 | 9首 |
| 五言絶句 | 『凌』0・『文』5・『経』2 | 7首 |
| 七言排律 | 『凌』1・『文』2・『経』3 | 6首 |
| 五言排律 | 『凌』1・『文』2・『経』1 | 4首 |
| 計 | 21(90) 33(148) 33(117) | |

右の表を一覧して、先ず驚くことは、嵯峨帝が、七種の法格を、それぞれ各別に具えた、すべての形態の詩を試みておられることである。

明治期の末までは、街に村に漢学漢詩の師範が、なお遺墨を守り、門外の政、官、軍、財界人の中にも、実名の外に雅号を用意して漢詩文をたしなむ人も少なくなかった。維新の三傑西郷隆盛(南洲)・木戸孝允(松菊)・大久保利通(甲東)、総理大臣伊藤博文(春畝)・元師、陸軍大将、総理大臣山県有朋(含雪)・外務大臣陸奥宗光(福堂)、三菱商会の初代岩崎弥太郎(東山)・明治、大正期の実業界の指導者渋沢栄一(青瀨)等々。
しかしその作るところの漢詩は、ほとんどが、五絶、七絶のたぐいで、その他の法格によるものを見た記憶がない。漢詩人と称する専門家においても、ほとんどそれに近かった。

三 嵯峨御製の法格と詩想

「それに比して、嵯峨天皇が、絶句はもとより、その他すべての法

格の作詩を試みておられただけでなく、新渡来の、近々半世紀の新興の法格雑言にまで意欲を示されたことは、驚嘆に価する。

例へば、御製「雑言、漁歌五首」のごときは、唐の詩人張志和の作「漁歌子」の体の模倣であろうと指摘されているが、張志和は、嵯峨在位を遡る半世紀ほどの人物である。日唐間の文化交流において五十年という距たりは、近いころといふべきであろう。張志和創始という雑言体が、早々に渡来し、嵯峨帝が、早々に、それを取り入れなさったのである。天皇の強い唐風摂取のお気持の現れといふべきであろう。

次に、勅撰三集中の嵯峨御製を、法格別に類別し、作例各一首(三集計三首)、その余は題名のみを挙げてみると、

雑言

神泉苑花宴賦落花篇

神泉苑の花宴に落花を賦する篇。

過半青春何所催

過半の青春、何の催す所ぞ、

和風数重百花開

和風数重、百花開く。

芳菲歇尽無由駐

芳菲歇尽せば、駐むるに由無し、

爰唱文雄賞宴来

爰に文雄を唱ひ、賞宴来る。

見取花光林表出

見取す、花光の林表に出づるを、

造化寧仮丹青筆

造化寧ぞ仮らん、丹青の筆。

紅英落処鶯乱鳴
 紫萼散時蝶群驚
 借問濃香何独飛
 飛來滿坐堪襲衣
 春園遙望佳人在
 乱雜繁花相映輝
 点珠顔綴駘驪吹
 人懷中
 嬌態閑
 朝攀花
 暮折花
 攀花力尽衣帶賒
 未厭芬芳徒倚
 流連林表晚光斜
 妖姬一翫已為樂
 不畏春風忽吹落

紅英落つる処、鶯乱れ鳴き、
 紫萼散ずる時、蝶群驚く。
 借問す、濃香何れより独り飛び、
 飛來し坐に滿つれば、衣を襲ふ
 に堪るか。と。
 春園遙に望めば、佳人在り。
 乱雜繁花、相映して輝き、
 点珠顔綴、駘驪として吹く。
 人懷の中、
 嬌態閑かなり。
 朝に花を攀ち
 暮に花を折る。
 花を攀ち力尽き衣帶賒く、
 未だ芬芳を厭はず、徒らに倚
 す。
 林表に流連し、晚光斜なり。
 妖姬一たび翫び已に樂しと為
 す。
 畏れず、春風総て吹落すること
 を。

对此年美絶何憐
 一時風景豈空捐

此の年美に對し、絶えて何をか
 憐まん。
 一時の風景、豈空しく捐てんや。

代神泉古松傷衰歌一首

神泉の古松に代りて衰へし
 を傷む歌一首。

昔從凡木殖上林
 過却風霜年幾深
 帝者愛貞賜恩顧
 水亭忽構頻近臨
 本森沈
 今顛頓
 長条縮折乏蒼翠
 不是辞榮好寂寞
 還愁稟質抱幽情

昔凡木を上林に植ゑし従り、
 風霜を過却し、年幾ばくか深き。
 帝者は貞を愛で、恩顧を賜ひ、
 水亭、忽ちに構へ頻りに近臨し
 たまふ。
 本は、森沈なり、
 今は、顛頓す。
 長条、縮折蒼翠に乏し。
 是れ榮を辞り、寂寞を好むには
 あらず、
 還りて愁ふ、稟質幽志を抱ける
 ことを。

春江賦

春江の賦

仲月春氣滿江郷

仲月の春氣、江郷に滿ち、

新年物色變河陽

新年の物色、河陽を變ず。

江霞照出辞寒彩

江霞、照らし出でて、寒彩辭り、

海氣晴来就暖光

海氣、晴れ来り、暖光に就く。

柳懸岸而烟中綻

柳、岸に懸りて、煙中に綻び、

桃夾堤以風後香

桃、堤を夾み、以て風後に香し。

望春江兮騁目

春江を望み、目を騁せ、

觀清流之洋洋

清流の洋洋たるを觀る。

或漫兮似不流

或は漫くして、流れざるに似、

或渺兮逝不留

或は渺として、逝きて留まらず。

長之難可識

長くして、識るべきこと難く、

濬之誰能測

濬くして、誰か能く測らん。

茲可謂春氣動而著於江色也

茲に春氣動いて江色に著はると謂ふ可し。

是以羽族翱翔

是を以て、羽族、翱翔し、

鱗群頡頏

鱗群、頡頏す。

續紛雜沓

續紛、雜沓し、

載來載行

載ち来り、載ち行く。

咀嚼初藻

初藻を咀嚼し、

吞茹新荇

新荇を吞茹す。

各各吟叫

各各、吟叫し、

処処相望

処処、相望む。

涉人廻楫

涉人、楫を廻らし、

与淵客而為倫

淵客と与にして倫を為す。

漁童構宇

漁童、宇を構へ、

接鮫室而同隣

鮫室に接して隣を同じくす。

随波瀾之渺邈

波瀾の渺邈たるに随ひ、

轉舳艫而尋津

舳艫を轉じて津を尋ぬ。

菱歌於是頻沿泝

菱歌、是に於て頻りに沿泝し、

客子於是不勝春

客子、是に於て春に勝へず。

茲可謂江村春而感於情人也

茲に江村春にして、情人をして感ぜしむと謂ふ可し。

于時花飛江岸

時に、花、江岸に飛び、

草長河畔

草、河畔に長ず。

蝶態紛紜

蝶態、紛紜として、

鶯 声 撩 乱

鶯声、撩乱す。

遊 覽 未 已 日 落 淡

遊覽未だ已まざるに、日、淡に落ち、

夜 在 江 亭

夜、江亭に在り。

高 枕 臥 矣

枕を高うして臥す。

江 上 月

江上の月、

浪 中 明

浪中に明かなり。

静 如 練 而 雲 間 発 光

静かなること、練の如くして、雲間、光を発し、

与 水 而 共 清 清

水と与にして、共に清清たり。

山 風 入 於 戸 牖 兮

山風、戸牖に入り、

聽 颼 颼 乎 松 声

颼颼たる松声を聴く。

帰 雁 欲 辞 汀 洲 去

帰雁、汀洲を辞して去らんとし、

飢 猿 曉 動 羈 旅 情

飢猿、曉に羈旅の情を動かす。

帰 旅 乘 春 心 轉 幽

帰旅、春に乘じ、心転幽かにして、

江 南 江 北 事 遊 遊

江南江北、遊遊を事とす。

総 為 春 深 多 感 歎

総て春深き為に、感歎多く、

年 年 江 望 得 銷 憂

年年の江望、憂を銷することを得。

神泉苑九日落葉篇一首

(雑30句・文華)

重陽節、菊花賦

(雑44句・経国)

重陽節、神泉苑賦秋可哀

(雑34句・同上)

鞞鞠篇一首

(雑29句・同上)

九日、翫菊花篇

(雑28句・同上)

清涼殿画壁山水歌一首

(雑24句・同上)

五言律詩

重陽節、神泉苑賜宴群臣、勒空通風同

(五律・凌雲)

重陽の節、神泉苑に宴を群臣に賜ひ、空通風同を勒す。

登 臨 初 九 日

登臨す、初九日、

霧 色 散 秋 空

霧色、秋空を散ふ。

樹 聽 寒 蟬 断

樹聴けども、寒蟬断え、

雲 征 遠 鴈 通

雲征けば、遠鴈通ふ。

晚 藥 猶 含 露

晚藥、猶露を含み、

衰 枝 不 裊 風

衰枝、風に裊やかならず。

延 祥 盈 把 菊

延祥、菊を盈把すれば、

高 宴 古 今 同

高宴、古今同じ。

長門怨一首

長門の怨・一首。

(五律・文華)

日暮深宮裡

日暮、深宮の裡、

重門閉不開

重門、閉じて開かず。

秋風驚桂殿

秋風、桂殿を驚かし、

曉月照蘭台

曉月、蘭台を照らす。

對鏡容華改

鏡に対かへば、容華改まり、

調琴怨曲催

琴を調ぶれば、怨曲催す。

君恩難再望

君恩、再び望み難く、

買得長卿才

買ひ得たり、長卿が才。

早春一首

早春。一首。

(五律・経国)

玉律三陽始

玉律、三陽の始、

年芳万里生

年芳、万里に生ず。

山晴銷片雪

山晴れて、片雪を鎖し、

地暖動群萌

地暖かにして、群萌を動かす。

色微沙嶼草

色微なり、沙嶼の草、

暝涉柳園鶯 暝涉す、柳園の鶯。

唯有歸飛鴈 唯、歸飛の鴈有り、

連連回北声 連々、北に回る声。

秋日、皇太弟池亭賦天字

婕妤怨

王昭君一首

梅花落

折楊柳

和光法師遊東山之作一首

和澄公臥病述懷之作一首

和尚書右丞安世銅雀台一首

侍中翁主挽歌詞二首

同内史滋貞主追和武藏録事平吾訪幽人遺跡之作一首

賦得隴頭秋月明一首

春日作一首

和藤朝臣春日、^{過(イ)}過前尚書秋公婦病作一首

和膏清公、春雨之作一首

奉和旧對雪一首

(五律・凌雲)

(五律・文華)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(五律・経国)

(同上)

(同上)

(同上)

七言律詩

九月九日、神泉苑宴群臣、各賦一物得秋菊

(七律・凌雲)

九月九日、神泉苑に於て群臣と宴し、各一物を賦し秋菊を得たり。

晏商季序重陽節

晏商の季序、重陽の節、

菊為開花宴千官

菊、花を開く為に、千官を宴す。

藥耐朝風今日笑

藥、朝風に耐へ、今日笑ひ、

榮露夕露此時寒

榮、夕露に露ひ、此の時寒し。

把盈玉手流香遠

把りて玉手に盈つれば、香を流すこと遠く、

摘入金杯弁色難

摘みて金杯に入るれば、色を弁ずること難し。

聞道仙人好所服

聞道、仙人好んで服す所、

對之延壽動心看

之に對し壽を延べ、動心を看る。

江頭春曉一首

江頭の春曉。一首。

(七律・文華)

江頭亭子人事睽

江頭の亭子、人事に睽き、

欹枕唯聞古戍雞

枕を欹てて唯聞くは、古戍の雞のみ。

雲氣濕衣知近岫

雲氣、衣を湿らしては、岫に近きことを知り、

泉聲驚寢覺隣溪

泉聲、寢を驚かしては、溪に隣きことを覺ゆ。

天辺孤月乘流疾

天辺の孤月、流に乗りて疾く、

山裏飢猿到曉啼

山裏の飢猿、曉に到りて啼く。

物候雖言陽和未

物候、陽和未だしと言ふと雖も、

汀洲春草欲萋萋

汀洲の春草、萋々ならむとす。

和藤是雄春日、過安禪師旧院一首

(七律・經國)

藤是雄の春日、安禪師の旧院を過ぎるに和す。一首。

積子歸真炎涼變

積子、真に歸し、炎涼變じ、

空山獨閉窓禪扃

空山、獨り閉ち、禪扃に窓す。

草堂空駐松蘿月

草堂、空しく松蘿の月を駐め、

石室罷翻了義經

石室、了義經を翻するを罷む。

護法鬼神何日會

護法の鬼神、何の日にか會はん、

隨緣猿鳥竟誰聽

隨緣の猿鳥、竟に誰か聽かん。

道心拭淚禮遺跡

道心、涙を拭ひ、遺跡を礼すれば、

何恨化身不久停

何ぞ恨みん、化身の久しく停まらざるを。

夏日、皇太弟南池

秋日、入深山

夏日、左大將軍藤冬嗣閑居院

江亭曉興

春日、遊狹日暮宿江頭亭子

和左大將軍藤冬嗣河陽作

和左金吾將軍藤緒嗣、過交野離宮感旧作

和菅清公秋夜途中聞笙

和菅清公賦早雪

聽誦法華經、各賦一品、得方便品題中聽韻

贈綿寄空法師

饒右親衛少將軍朝嘉通、奉使慰撫閩、東探得臣

贈賓和尚

春日嵯峨山院、探得遲字一首

春日大弟雅院一首

和金吾將軍良安世春齋別筑前王太守還任

左兵衛佐藤是雄見授爵之備中謁親因賜詩一首

過梵寂寺一首

冷然院各賦一物得澗底松一首

和良將軍題瀑布下蘭若、簡清大夫之作一首

早春觀打毬一首(使渤海客 奏此樂)

閑庭早梅一首

山居驪筆一首

除夜一首

(七律・凌雲)

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(七律・文華)

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

(同) 上

五言排律

重陽節神泉苑、同賦三秋大有年、題中取韻、大韻成篇

(五排12句・凌雲)

重陽の節、神泉苑にて同じく三秋の大に年有るを賦す。題中韻を取る。大韻篇を成す。

旻氣何ぞ寥郭たる、

高きに登り望めば、悠悠たり。

大田、豊稔を穫、

此れより歳工休む。

芳莢を筵上に薦め、

時に菊を盞中に浮ぶ。

林洞く、揺落に逢ひ、

池清く、潦収と為す。

蟋蟀、声を蔵むる曉、

蒹葭、色を変ずる洲。

重陽、常に宴に宜し、

旻 氣 何 寥 郭
登 高 望 悠 悠
大 田 穫 豊 稔
從 此 歲 工 休
芳 莢 筵 上 薦
時 菊 盞 中 浮
林 洞 逢 揺 落
池 清 為 潦 収
蟋 蟀 蔵 声 曉
蒹 葭 変 色 洲
重 陽 常 宜 宴

况復有年秋 况んや復、年有る秋をや。

史記講竟賦得張子房一首

(五排12句・文華)

答澄公奉獻詩一首

(五排20句・文華)

和惟逸人春道、秋日、臥疾華嚴山寺精舍之作一首

(五排12句・経国)

七言排律

和左衛督朝臣嘉通、秋夜寓直周廬、
聽早鴈之作

(七排12句・凌雲)

左衛督朝臣嘉通、秋夜、周廬に
寓直し、早鴈を聴くの作に和す。

涼秋八月驚塞鴻

涼秋八月、塞鴻に驚き

早報寒声雜遠空

早報の寒声、遠空に雜ふ。

絶域伝書全漢信

絶域、書を伝へ、漢信を全うし、

関門表弓守胡戎

関門、弓を表はし、胡戎を守る。

凌雲陣影低天末

雲を凌ぐ陣影、天末に低く、

叫夜遥音振水中

夜に叫ぶ遥音、水中に振ふ。

葵女弹琴清曲響

葵女、琴を弾ずれば、清曲響き、

潘郎作賦興情融 潘郎、賦を作れば、興情融る。

朝搏渤澥事南度 朝に渤澥を搏ち、南度を事とし、

夕宿煙霞耐朔風 夕に煙霞に宿し、朔風に耐ふ。

感殺周廬寓直者 感殺す、周廬寓直の者、

終宵不寢意無窮 終宵、寝らず、意窮まり無し。

夏日臨泛大湖一首 (七排12句・文華)

哭資和尚一首 (七排12句・文華)

和内史貞主秋月歌一首 (七排24句・文華)

和藤是雄旧宮美人入道詞一首 (七排12句・経国)

和御製聞右軍曹入道、簡大將軍良公一首 (七排12句・経国)

青山歌一首 (七排19句・経国)

五言絶句

和菅清公傷忠法師一首

菅清公が忠法師を傷むに和す。
一首。

(五絶・文華)

臘老煙雲裡 臘老ゆ煙雲の裡、

歸真攝化形 歸真、化形を攝す。

不知何世界 知らず、何れの世界か、

出現 救蒼生 出現して蒼生を救はむことを。

見滋貞主、春日病起一首 (五絶・経国)
和野評事旅行吟 (五絶・経国)

七言絶句 河陽駅経宿、有懐京邑 (七絶・凌雲)

河陽亭子経数宿 河陽の亭子、数宿を經、
月夜松風惱旅人 月夜の松風、族人を悩ます。

雖聽山猿助客叫 山猿、客を助け叫ぶを聴くと雖
唯能不憶帝京春 唯能く、帝京の春を憶はざらんや。

和進士真生初春、過菅祭酒宅、悵然傷懷カン・ナヒバシ閒布臣藤秀才作 (七絶・凌雲)

吏部侍野美、聞使辺域、賜帽裘 (同 上)

河陽十詠四首 河陽花 (七絶・文華)

江上船 (同 上)

江辺草 (同 上)

山寺鐘 (同 上)

和巨識人春四詠二首 (七絶・文華)

舞蝶 (七絶・文華)

飛燕 (同 上)

故関聴鶏一首 (同 上)

塞下曲一首 (七絶・経国)

見老僧帰山一首 (同 上)

与海公飲茶、送帰山一首 (同 上)

春日、過山寺觀菩薩旧壇一首 (同 上)

問浄上人疾一首 (同 上)

寄浄公山房一首 (同 上)

和惟山人春道晚聴山磬一首 (同 上)

老翁吟一首 (同 上)

聴早鶯、示惟山人春道一首 (同 上)

和滋貞主城外聴鶯、簡前藤中納言之作一首 (同 上)

山夜一首 (同 上)

漁歌五首 (同 上)

標題に、「嵯峨御製の法格と詩想」としながら、時間切れのため、「詩想」に及ぶことができなかつた。

「法格」は、詩の形であり、「詩想」は、詩の心であり、内容であり、材料であるから、時に詩材ともいう。

「法格」は、詩をして、快いリズムを帯びる韻文たらしめるための、文字排列の決まりであり、「詩想」は、作者が事物に托して表現したいと願う、〈胸の内〉であり、〈思いのたけ〉である。

たとえその詩が、情を抑えた、叙事、叙景の詩であっても、文学作品である詩を以って表現したいと願う以上、その言語表現には、

作者の情緒の纏綿たるは、当然のことである。

作者の詩作の目的や願望や情況は、多くの場合、詩題に要約表白されており、作者の全人格を露呈している。作者そのもの、といっている。

一連の嵯峨御製は、嵯峨天皇その方である。

その故に、時間切れと称して割愛した章節「詩想」の代りに、詩題を羅列して責めをふさぎ、あえて標題を改めることもしなかった。

注

- (1) 『渡辺三男博士古稀祝賀日中語文交渉史論叢』(昭和五四・四・一五)
- (2) 「勅撰三集に見る嵯峨帝側近の詩臣」(『駒沢国文』第三十号、平成五・三)
- (3) 昭和十五年は皇紀二千六百年に当たるとして、秩父宮雍仁親王を総裁に仰いで、紀元二千六百年奉祝会を結成(会長近衛文麿公爵、幹事長歌田千勝)し、十一月十日、宮城外苑に、天皇・皇后をお迎えして、盛大な奉祝会を催し、参会者に、同会編纂するところの『聖徳餘光』『列聖珠藻』の二書を贈呈した。『聖徳餘光』は、主として辻善之助が当たり、桓武天皇より明治天皇に到る歴代天皇の治世を編述し、『列聖珠藻』は、主として佐々木信綱博士が当たり、神武天皇より大正天皇に到る、歴代天皇御製の和歌を撰集した。
- (4) 昭和五九年は、弘法大師入定後千五百年に当たるので、真言宗別格大本山嵯峨御所大覚寺でも、宗祖弘法大師追善の大法要を厳修するほか、各種の記念行事が催されたが、その一つに、高野山・東寺・大覚寺の下賜ほか、最大の外護者であった嵯峨天皇の御伝『嵯峨天皇紀』(林屋辰三郎氏・下坂守氏執筆。菊版二五二頁)を編纂した。

(5) 『経国集』は、もと二〇巻、作者一七八人による賦一七篇・詩篇九

一七首・序五一篇・対策三八篇を収録していたが、今は六卷(巻一・一〇・一一・一四・二〇)の残闕本に、賦一七篇、対策二六篇、詩篇二二一首を伝えるのみである。

(6) 『大漢和辞典』(諸橋博士編)に、「颯颯は風の音」、「颯颯は風のふきすぎること」とある。(平成五・一二・一〇)